

『SAC』 / 『SAC Journal』 - イベント=出来事としての出版物 (printed matter) -

「繭の中で時がとだえた。外は暗くなったが、繭の中はいつまでも夕暮れで、内側から照らす夕焼けの色に赤く光っていた。」

(安部公房「赤い繭」)

草月アートセンター(略称:SAC)は、勅使河原宏をディレクターとして旧草月会館において組織され、1958年から1971年までその活動を続けた。SACは様々な実験的イベントを試み、海外のいくつかの先鋭的活動を紹介しただけではなく、様々な出版物の編集・発行を精力的に行った。その活動についてはすでに2冊の出版物^{*1}によって詳細なドキュメントがなされている他、『Studio Voice』(2007年7月号)において出版物のデザインが注目され、また「勅使河原宏展」(埼玉県立近代美術館にて現在開催中)においてもその一部が紹介されるなど関心が高まってきている。本発表では、SACの機関誌である『SAC』/『SAC Journal』^{*2}に照準を合わせ、その構成を分析する。

「(SAC)もNo.10を数えるようになった。草月アートセンターの催しに併行して編集されているが、単なるパンフレットではなく、舞台上に表現されるものと同じ質のもので、この小冊子にも内容と表現をつけてゆきたいと今迄にも充分意識があった。」『SAC』No.10の「製作室」に掲載されたこの一文は、『SAC』/『SAC Journal』が併行して行われたイベント=出来事のドキュメントや予告を行う場であることと同時に、それ自体が出来事であることを目論んだ出版物であることの表明である。7インチ盤レコードのジャケット・サイズである17.5×17.5cmの版型、目次とページ番号が存在しない等、その非常に特殊なレイアウトによって『SAC』/『SAC Journal』はいかに内容と表現を獲得し、出来事としての出版物になることができたのか。

また、草月ホールで行われた連続イベント「SOGETSU CONTEMPORARY SERIES」の第6回《作曲家集団第5回例会、作曲家集団12月の会：諸井誠、舞台のための〈赤い繭〉》(1960年12月8日)とその原作である安部公房の「赤い繭」^{*3}は、一つのイベント・プログラムとしてSACのヒストリーの中に位置づけられるだけでなく、出来事の問題を表現する作品である。

「実存的不安、共産主義、主体の喪失」といったモチーフによって読解され、半ば誤解されてきたこの作品の構成のプロセスを緻密に追うことで「赤い繭」とは何かを明らかにする。そして、それが『SAC』/『SAC Journal』に反照する様を描き出す。[久保]

*1: 奈良義巳、野村紀子、大谷薫子、福住治夫 編『輝け60年代：草月アートセンターの全記録』(フィルムアート社、2002年)。

芦屋市立美術館(加藤瑞穂・山本淳夫)、千葉市美術館(藁科英也) 編『草月とその時代 1945-1970』(草月とその時代実行委員会、1998年)。

*2: SACの機関誌はNos.1-12までタイトルが『SAC』であり、No.14よりタイトルを『SAC Journal』へと変更した。その変更に伴い『SAC』かつ『SAC Journal』であるようなNo.13は出版されなかった。

*3: 安部公房「赤い繭」、『現代日本文学大系 76: 石川淳・安部公房・大江健三郎』(筑摩書房、1969年) pp. 210-211。初出: 『人間』(1950年12月号)。